

2月15日 木島平小スキー部 アベック優勝!

大雪の中、「第16回木島平ジュニアクロスカントリー大会」が行われ、木島平小学校がリレー競技で男女ともに優勝しました。

前週行われた「第32回長野県小学生クロスカントリー選手権大会」に続いての連覇となり、今シーズン行われた県内大会全てのリレー競技で優勝しています。

2月16日(日)、吹雪の中行われた個人戦においても優秀な成績を納めており、県内ではトップレベルのチームに成長しています。現部員は43人。県内小学校では最も多い部員数となっております。シーズン後半戦も益々の活躍が期待されます。



「故郷は故ある郷である※」紹介

練馬区 野口規久男

都会暮らしは五十年を越えたが、故郷北信州の風景は忘れることがない。恩師の多くは故人になったが、私たちの学年は、木島平中学校が新設された当初丸三年間通学した最初の学年で大月松二校長以下気魄と情熱に満ちた若い教師との語らいは、今以て心に深く刻印されている。

筆者も大学卒業後三十年間医学の研究生活と臨床教育に携ったが、少年期に受けた心の教育がその後学生や患者教育にどれ程役立ったかしれない。

人はなぜ生地にこだわるのか、「故郷性」とは何なのか、現代人の心のよりどころを問うた書です。木島平の山村風景、緑一色の夏山、色彩豊かな紅葉林は生涯心から離れません。

思春期は成人になるための回避し得ない試練と跳躍の時期である。少年的思考から安定した思考へ展ずる転換に迫られ、故郷の風景や恩師との語らいを離れて考えることができませぬ。「思春期危機」なる言葉がありますが、一つの大きな社会問題となっております。

木島平には美しい自然風景、村人の優しさや逞しさが昔から育っています。日本一明るい農村といわれることを願っています。

※ 発売日 平成25年5月 国書刊行会より発行



会報原稿募集中!

【送付先】〒389の2392 木島平村役場内 ふるさと応援団事務局

fax 0269の82の4121 ☒ kicho@kijimadaira.jp まで

ふるさとの記憶

さいたま市 塩沢 雄蔵

庭の隅に黄色く咲いている石菖の花を見ながら、ふと、ふるさとのことを思い出した。年々薄れゆく記憶の中から、いくつか記してみたい。

①矢垂れの地藏さん

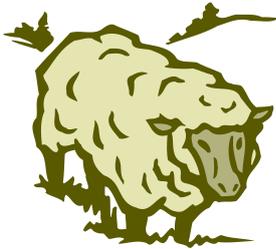
昭和15年秋取り入れのさなか、母が産気付き、急ぎ帰り生まれたという。ところは、旧穂高村小見。田畑あわせて、1町歩ちよつとの小百姓の次男坊。2〜3歳の時、でんぐり返る奇病にかかり、医者の手にも負えず、行者の教えにより、旧市川村の矢垂れの地藏さんにお参りしたとのこと。雪の降る朝、母は泣きわめく私を背負い、ケツトを頭からかぶり、片道3里の途についたという。母の生前、病状など、もう少し詳しく聞いておけばよかったと、悔やまれてならない。

②一番古い記憶

最も古い記憶は、5歳のときの終戦の日のことである。焼けつくような真夏の昼頃、庭で遊んでいたら、西の家のおじいさんが「戦争は終わった」と知らせにきてくれた。当時、ラジオは極一部の家にしかなかった。5歳の記憶というのは、早いか遅いかは知らないが、なぜかその光景が今でも鮮明に浮かんでくるから不思議である。

③薬指の思い出

昭和20年代後半、家畜の飼育が盛んであった。我が家でも、鶏、アングラ兔、緬羊、豚、乳牛を飼っていた。これらの家畜の世話は、大半が子供の仕事。ある日、緬羊に餌をやっていたとき、突然怒って頭で突いてきた。よける間もなく、右手薬指は緬羊の頭と丸太に挟まれ、激痛とともに潰れた。今も爪の変形は残り、見るたびに、につつきを思いだす。



④ごぼう俵

小見地区の西方、樽川と千曲川の堤防に囲まれた平坦部は、通称小見島と呼ばれているが、そこにごぼう畑があった。丁度、秋も深まった今頃が収穫時。出荷の際は、コモ巻きにするが、そのコモ（ごぼう俵）を編むのも冬休みの仕事であった。土間で藁をたたき、その藁で縄をない、ごぼう俵を編んだ。当時、勉強しなくてもあまり怒られなかったが、家の手伝いをしないと怒られたので、勉強の好きでなかった私には、良き時代であった。

⑤少年王者

小学5〜6年の頃と思うが、父が飯山に行った折、一冊の本を買ってきた。それは、山川惣治の絵物語「少年王者」モンスター・ツリー編だった。当時、少年向け雑誌おもしろブックに連載中であつたが、なかなか買ってもらえなかつた。うれしくて、何回も何回も繰り返し読み、好きな場面の絵も文も覚えてしまったほど。この血湧き肉躍る冒険物語「少年王者」は、今でも私の一番好きな本である。



⑥最後の楽しみ

最後に、近況を少し。私は18歳でふるさとを離れ、北は北海道から南は九州、沖縄まで全国を転々とした。その間、ほとんど帰省しなかつた。ようやく、さいたまを終のすみかと定めてからは、年に1回程度帰り、万緑のふるさとに癒されている。

若い頃は、よく酒を飲みよく山野を歩いた。近年はただボーとした日々のため、老化が急速に進行。何かボケ防止はないかと、考えていたとき目にしたのが、芭蕉の「俳諧は最後の樂也」。早速、地元の句会に入り半年。

まだ、楽しみの域にはほど遠く、苦しみのさなかにあるが、いつの日か、旅人と呼ばれんことを夢みつつ……。駄句一句。

ふるさとのごぼう畑や赤とんぼ